

かわらばん

冬号

名古屋大学
高等教育研究センター
ニュースレター第89号

コロナ禍を経て注目される 「大学のコミュニティ」

先日、昼休み時間に窓から外を眺めていたら、大きな鞆を持った学生が軽やかな足取りで歩いていました。彼の前にも後ろにも、たくさんの方が歩いていきます。久しぶりの晴天だったためか、上着を脇に抱えて、楽しそうに話をしながら移動する学生たちの騒めきが聞こえてきました。このとき「キャンパスに学生生活が戻ってきたんだな」と、ようやく実感できました。

先日、昼休み時間に窓から外を眺めていたら、大きな鞆を持った学生が軽やかな足取りで歩いていました。彼の前にも後ろにも、たくさんの方が歩いていきます。久しぶりの晴天だったためか、上着を脇に抱えて、楽しそうに話をしながら移動する学生たちの騒めきが聞こえてきました。このとき「キャンパスに学生生活が戻ってきたんだな」と、ようやく実感できました。

生関与を高めるのは難しいと言われていました。特に対面での活動が制限されたなか、コミュニティの喪失について大きな打撃を受けた米国大学の学生寮では、いま、「コロナ禍後の学寮プログラムに求められる取り組み」についての議論が盛んに行われています。ある学生寮の実務担当者や研究者の共同ワークショップでは、長い時間をかけて議論されたのが、学寮内でのコミュニティ形成の方策でした。その具体的な内容には、プログラムへ学生が参加するための促進要因として、「学生同士の創発的な雰囲気」をはじめ、「情報へのアクセシビリティ」「学生のメンタルヘルスの改善」「寮が居場所である」という感覚形成「さまざまプログラムやイベント活動への参加の推奨」などの項目が含まれていました。そして、これらの方策を学寮プログラムの基盤的要素として、新しい参照モデルに盛り込むよう、特に学生寮の実務担当者から強い要望があっ

たそうです。これは、さまざまなカリキュラムや教育プログラム、学生支援の取り組みに対して、学生参加を促すためには、今まで以上に、学生個人や学生集団が前向きな気持ちを持って参加できるように、彼らの心理的側面や社会的側面に十分な注意を払う必要があるという、コロナ禍での学寮生活と学生を見つめつけてきた実務担当者からの重要な示唆だと思えます。しかし残念ながら、例えば大学内の集団としてのコミュニティが持つ効果やデメリットについては、まだ学術的な根拠となりうる成果が十分に蓄積されていないといえます。

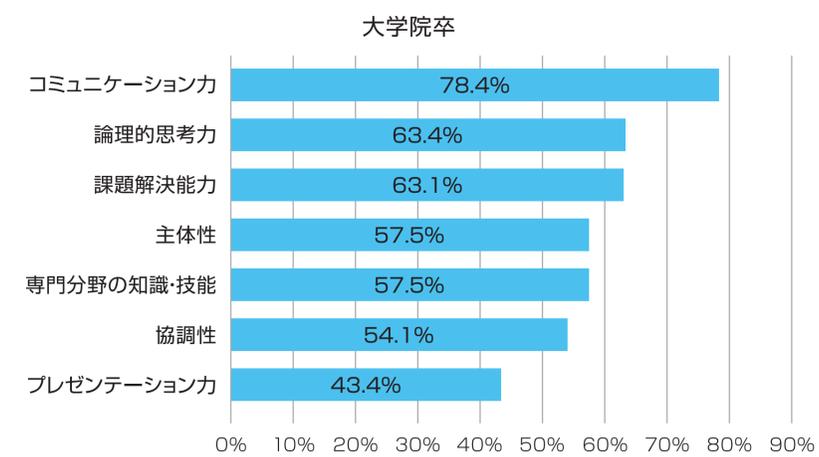
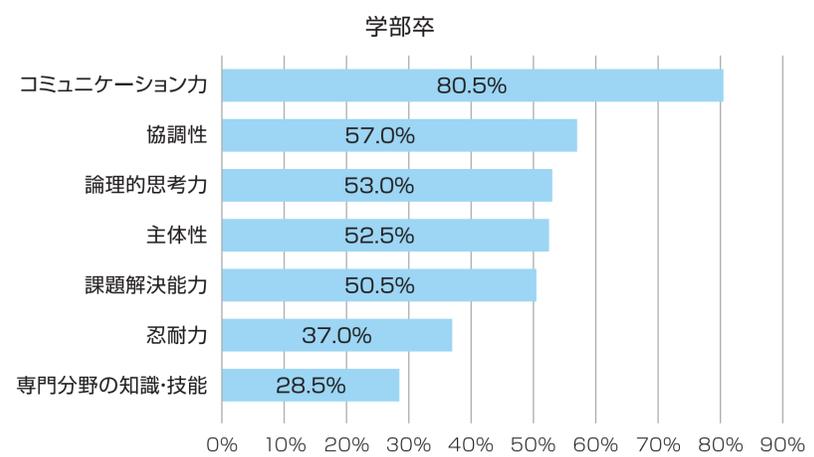
コロナ禍以後も、社会情勢や経済的不況など、学生を取り巻く環境や問題は複雑かつ困難さを増しています。限られたリソースの中で、効果的に学生の学びを導くためにも、「質の高いプログラム・サービスを提供する」と同時に学生の心理的側面や学生同士、教職員と学生の相互のやりとりなど、キャンパスにおけるコミュニティ形成のための効果的なアプローチについて、今後も注視していきたいと思えます。

（安部有紀子）

グラフで見る名大生 [24] 名大生が社会に出て、重要だと思う能力とは？ (学部卒と大学院卒の比較)

名古屋大学では、今年度、卒後3年目の社会人を対象とした「卒後調査」を実施しました。今回はそのなかから、「就労する上で、重要だと思うものをお答えください」という項目に着目し、学部卒3年目と院卒3年目を比較してみます。学部卒・大学院卒ともに、「コミュニケーション力」を挙げた割合が最も高く、これは共通の傾向といえるでしょう。一方で、2番目以降の能力に関しては特徴が異なります。学部卒では、「協調性」「論理的思考力」「主体性」「課題解決能力」が続きますが、1番目の「コミュニケーション力」との差は24%~30%と大きく開いています。一方、大学院卒では、「論理的思考力」「課題解決能力」「主体性」「専門分野の知識・技能」が続き、1番目の「コミュニケーション力」との差は15%~21%と、学部卒に比べて差が小さいことがわかります。この分析結果は、院卒生が学部卒生に比べて、コミュニケーション力だけでなく、専門的な能力や課題解決能力をはじめとする多様な能力が求められる業務に従事している割合が高いことを示しています。また、大学院で培ったこれらの能力を現在の職務で活かしていると感じている可能性もあるでしょう。そのような関連性についての詳細な分析結果は、改めてご報告いたします。

（安田淳一郎）



【出典】名古屋大学教育基盤連携本部「グラフで見る名大生 卒後アンケート編(2024年度実施)」http://www.nuqa.nagoya-u.ac.jp/graph_poster/index.html
注1)学部卒生の有効回答数:201件(回答率:21.4%)、院卒生の有効回答数:322件(回答率:18.5%) 注2)グラフは上位7項目。複数選択。

かわらばんへのご意見・ご感想をお待ちしております。センターWEBページのフォームよりお寄せください。

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

キャンパス Campus

大学の校地、構内をあらわす「キャンパス」という言葉は、大学関係者には馴染みの言葉です。「キャンパスマスタープラン」や「オープンキャンパス」に関わったことのあるかたも多いでしょう。ただし後者は、ふだんは閉ざされていることの裏返しのようにも感じられてしまうところでは。

「キャンパス」という言葉はラテン語からきていて、その原義は「広場」「原」だそうです。オックスフォード英語辞典によると、1774年にいまの米国プリンストン大学が使用したのが確認できる初出です。中世修道院を模した回廊型の閉鎖的空間とは異なる、開かれた様式を表現したものとして使用されたそうです。

設計思想は異なりながらも、世界各地のキャンパスは学生生活の中心となり、学生運動の舞台にもなってきました。近年登場した諸大学の「立て看同好会」も、学生あつてのキャンパスという価値観を象徴する動向と言えるでしょう。

他方で、キャンパスのない大学も登場してきました。オンラインですべての単位が取得できる大学・課程が多数ありますし、2014年に開学したミネルバ大学にいたっては特定のキャンパスをもたず、学生は世界各地に旅をしながら学びを続けます。

キャンパスのなかの施設にも変化が起きています。協同学習を促す施設・設備が増える一方、大学設置基準改訂により、講堂や運動場・体育館などを学外に借りることや、図書館に閲覧室・書庫などを設けないことが、状況に応じて可能になりました。旧世代の筆者にはこうしたキャンパスのイメージが即座には湧かないものの、自大学以外の施設が学生生活の思い出になる日は近いのかもしれませんが。

筆者は昨秋、銀杏並木で有名な某キャンパスを訪れました。そこで目に留まったのは、黄金色に染まった風景そのものではなく、それを写真に収めようとする観光客や家族連れの多さでした。キャンパスの内と外の境界が溶けてゆくような感覚のなか、「キャンパス」の意味、「開かれた大学」の未来に思いを馳せたところでした。

(齋藤芳子)

反DEEに揺れる 米国の大学から学べること

現在、米国における大学のDEE（Diversity, Equity and Inclusionの略）を抑制する動きが、多くの議論を呼んでいます。その背景には社会的、政治的、文化的な要因が絡み合っているとされています。この動きの中心には、「平等な機会」を掲げつつも、結果的に特定のグループを優遇または冷遇することへの批判や、「メリトクラシー（能力主義）」の再強調といった議論が存在します。特に注目されるのが、アフアーマティブ・アクション（積極的差別是正措置）

（位置）に対する反発や撤廃の動きです。また、大学での多様な研究や言説に圧力がかかる事例もあります。多様性（Diversity）、公正（Equity）、包摂（Inclusion）の3つの概念から構成されるDEEは、組織や社会において個人の違いを尊重し、すべての人が平等な機会を持ち、安心して参加できる環境を作るための基盤となる考え方は、近年、教育、ビジネス、行政など、多くの分野で注目されている重要なテーマです。大学教育の文脈では多

様性とは、学生や教職員の持つ属性や背景、価値観の違いを指します。公正とは、学生や教職員が異なるニーズや条件を持つことを認識し、それに応じた支援や機会を提供することを指します。包摂とは、それぞれの学生や教職員が差別や排除を受けないこととなく、組織や社会に積極的に参加し、その人らしく過ごせる環境を作ることを目指します。これらの理念を大学教育に組み込むことで、個人の成長だけでなく社会的課題の解決に直結するとされています。具体的には、物理的・制度的バリアフリーの推進、学びや生活における心理的安全性の確保、多文化共生教育

の強化といった課題が挙げられます。現在の米国の動きは、日本の大学にとって「DEEへの向き合い方」を再考する機会となるかもしれません。日本の大学は、米国の事例から教訓を得つつ、自国の文脈に合ったDEE方針を構築していく必要があります。その際には、DEEの意義を単なる「多様性の演出」としてではなく、「社会の持続可能な発展に資するもの」として広く共有することが重要です。新たなDEEモデルが構築できれば、それは国内だけでなく、国際社会においても評価されるように思います。

(松本みゆき)

センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせしています。本サービスへのご登録は、センターWEBページの「情報配信サービス登録はこちら」よりお申込ください。



読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

『論理的思考とは何か』

渡邊雅子 著

岩波書店（岩波新書） 2024年

大学教育では、期末レポートや授業中のディスカッション、論文執筆など「論理的であること」が求められます。ところが、教員からすれば当たり前である「論理的であること」は、学生にうまく伝わらない場合があります。それはいったいなぜでしょうか。

本書は、世界共通で普遍だと思われる「論理的思考」に、実はいくつかの文化的な「型」があることを示しています。多くの人は、西洋に由来する論理学の「形

式論理」や、アメリカ式エッセイに代表される「経済」領域の思考を、唯一の論理的思考とみなします。大学教育におけるアカデミック・ライティングもこの思考に近いと言えるでしょう。しかし著者は、「論理的思考」には目的の異なる四領域の型があり、それぞれの型に親和性の高い国があると述べます。本書は、アメリカ、フランス、イラン、日本を具体例として、四つの型が各国の作文教育でどのように扱われてきたかを明らかにしています。

著者が35年に渡り追究してきた本テーマに対する深い洞察は、大学教育への示唆にも富んでいます。第一に、大学におけるアカデミック・ライティングと、学生がこれまでに学習してきた作文とでは論理的思考の型が異なるかもしれないということです。第二に、学生が大学教育で身につけた論理的思考は、必ずしも卒業後に通用するとは限らないということです。

本書は大学教育を直接の対象とはしていません。しかしながら、本書を読むことにより、大学における論理的思考が当たり前でも唯一でもないことに気づかされます。それは、高校教育や社会との間のずれを認識し、接続のあり方を問い直すことに繋がります。そのため、本書は高大接続あるいは大社接続を議論するための土台となる一冊とも言えます。

(東岡達也)

高等教育研究センタースタッフ (2025年1月現在 ()内は専門領域)

センター長	北 栄輔	(情報学、機械工学、計算科学)	特任准教授	松本 みゆき	(産業・組織心理学、キャリア発達論)	名古屋大学高等教育研究センター 〒464-8601 名古屋市中種区不老町 Tel 052-789-5696 Fax 052-789-5695 URL web.cshe.nagoya-u.ac.jp
教授	加藤 真紀	(高等教育学、国際人口移動、知識創造)	特任准教授	和嶋 雄一郎	(教学IR、知識工学、認知科学)	
准教授	安部 有紀子	(高等教育マネジメント、学生支援)	特任助教	竹永 啓悟	(高等教育論)	
准教授	安田 淳一郎	(高等教育学、学習評価、物理教育研究)	客員	Kinjal Vijay Ahir	(インド サルダール・パテル大学)	
助教	齋藤 芳子	(科学技術社会論)		伏木田 稚子	(東京都立大学大学教育センター)	
研究員	東岡 達也	(高等教育論)		戸村 理	(東北大学高度教養教育・学生支援機構)	
				梅崎 修	(法政大学キャリアデザイン学部)	